

イギリス科ニュースレター

July 2024

32号

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1

(8号館 402号室)TEL/FAX 03-5454-6304 (直通)

Email: [british\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp)

Web: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp>

主任挨拶

西川杉子

昨年度に引き続き、2024年度S学期に主任を務めます西川杉子です。

2020年に始まったコロナ禍は、大学生活に大きな影響を及ぼしましたが、駒場では昨年度からキャンパスの平常化が進んでいます。イギリス科でも、コロナ前のようにコモンルームを開室し、再スタートいたしました。

イギリス科恒例のパーティもようやく再開です。今年度はイギリス科の新しいメンバーとして三原芳秋先生(文学・思想)が着任されたので、4月初頭には学生と教員と皆で歓迎会をひらき、シェリーならぬ日本酒で乾杯いたしました。コモンルームのソファに座って、気兼ねなくおしゃべりしながらお酒を飲むのは格別でした。

さて、私はといえば、18世紀半ばにコンスタンティノープル駐在イギリス大使を務めたユグノー亡命者の子孫について調査をしている関係で、この一年間に3回、トルコの都市イスタンブルに行く機会がありました。ご存知のようにイスタンブル(旧称コンスタンティノープル)はオスマン帝国の首都だったので、旧外国人居留地ペラの金角湾を見渡す高台に、イギリス大使館だった建物が公使館として残されています。私の目的はこの公使館付き礼拝堂の資料をみることでした。

18世紀の資料からはこの礼拝堂が、オランダ大使館付き礼拝堂とともに、さまざまなキリスト教徒、特にプロテスタントの人々を支援していたことがわかるのですが、実際にイスタンブルを歩い

てみると、いまでも多くのキリスト教の教会堂が残されているのに驚かされました。なかには朽ち果てるままに放置されているもの、モスクに転用されたものもありますが、犬も歩けばなんとやらのに教会堂(もしくはその廃墟、あるいは廃墟跡)が存在している。トルコといえばイスラム教徒が圧倒的に多数派ではありますが、数多くの文化が交錯した場所でもあり、街を歩くと幾重にも積もった歴史の諸層を感じさせられます。

実は、イスタンブルのイギリス公使館は2003年にイスラム過激派による爆弾テロのターゲットとなり、公使館のある一帯が破壊されました。この時にイギリス公使も殺害されています。そのためなのか、今でも公使館の警備は固く、公使館やチャプレン宛への問い合わせメールも梨の礫でした。昨年度、最初にイスタンブルを訪問した時には、同地にあるもう一つのイングランド国教会堂・クリミア記念教会を訪れて礼拝にも参加したのですが、特に近世の資料の手がかりはなく、公使館のチャプレンにも会えずに終わりました(ただし、その礼拝は、イギリス本土では近年はみかけないほど保守的なもので、それはそれで興味深かったのですが)。

しかしそうなるとこだわりは強くなるもの。また、21世紀になって出版されたイスタンブル大使館に関する研究書が、礼拝堂に関しては情報が誤っていたことなどが気になってしまい、年末年始を利用して、イスタンブルとトルコの第三の都市イズミルに行ってきました。イズミルは1923年までスミルナの名で知られていた国際的港湾都市で、近世にはイギリス・レヴァント会社の本拠地もおかれており、イングランド国教会も重要視していました。それは今でも変わら

ないだろうと見当をつけたのです。イズミルの司祭に面会して、ようやくイスタンブル公使館の司祭に紹介をしていただくことができました。

そして今年の3月、ようやくイスタンブル公使館付き礼拝堂に入ることができました。礼拝堂も2003年には瓦礫の山と化したそうですが、今は新しく再建された建物に、歴史的なメモリアルや墓碑が並べられていました。ただ、再建の費用捻出のために、礼拝堂周辺の土地をアラブ系ホテルに賃貸借することになったそうで、礼拝堂の裏手がこじやれたバーになっていたり、司祭館に隣接する建物の一階がイングリッシュ・パブになっていたり、と言われてみれば奇妙な一角です。複数の警備員が常駐していて、雰囲気はかなり物々しいのですが、イギリスも礼拝堂維持に苦勞しているのだなど、少し寂しく感じました。



イスタンブルの礼拝堂で得た情報は、今後の研究成果に活かしていきたいと思いますが、もう少し時間がかかりそうです。



新任のご挨拶

三原芳秋

本年 4 月に新任教員として着任いたしました、三原芳秋と申します。本郷の英文科で学士・修士課程を終えたのち英文研究室の助手に採用されたのもつかの間、フルブライト奨学生として米国に渡り、コーネル大学英文科の博士課程に進学しました。帰国後は、お茶の水女子大学、同志社大学、一橋大学大学院の教壇に立ってまいりましたが、このたび縁あってイギリス科のスタッフとして迎え入れていただくこととなりました。文Ⅲ生として駒場に遊んだ(!) 1993・94 年度から数えますと、ほぼ 30 年ぶりの帰還ということになります・・・「帰還」などと書くと、自分の〈起源〉(Origin) がここにある! とでも言い出すのではないかと思われるかもしれませんが、正直に申しますと、この 30 年間というものの駒場(ましてやイギリス科)とのつながりはほぼ皆無でありました。しかし、いまこうしてイギリス科の教員になってからふりかえてみますと、自分にとってじつに多くの大切な〈はじまり〉

(beginnings) がここにあったことに気づかされ、不思議なご縁に感じ入っている次第です。

入学したてのわたしは、半年前に一年間の英国留学から帰国したばかりの、それはそれは生意気な 18 才でした。なにがしたいわけでもなく「東大生」になってしまい、とりあえず「イギリス」と名のつく講義に出てみたりもしましたが、連休が明けるところには授業にもあまり出なくなり、いっばしの演劇青年を気どっていたものです。そんななか、銀杏並木をぶらぶらと歩いていて、「イギリスなんか」の講義を担当なさっていた先生とたまたま行きあったことがありました。そのとき、どういわけか(講義もろくに出ていなかったくせに)ついお辞儀をしてしまったのです。するとどうでしょう、その物腰柔らかな先生がこちらに近寄っていらして、「あのう、申し

訳ございませんが・・・どちらさまでいらっしゃいましたでしょうか・・・」とお尋ねになってくるではありませんか! しまったと思うも時すでに遅し、しかし怖いもの知らずの 18 才は平気のへいぞで自己紹介、しかも「先生の授業にも出てみたけれど半年前まで英国にいた身としては正直おもしろくなくて」などととんでもないことを口走ったように記憶しています。そんな厚顔無恥を絵に描いたような駒場生に対して紳士教授は、「英文学にご関心がおありでしょうか?」とさらに懇懇にお尋ねになる。こちらはますます調子に乗って、ロマン派の詩が好きだ、とくに「シェリー先輩」を愛誦しているなどと放言する・・・思い返すたびに赤面するしかないエピソードですが、この忘れもしない運命的(?)な初対面の際に、その紳士教授—山内久明先生—は熱心にこの不躰な対話者に耳を傾けてくださったのみならず、専門の授業で英詩を読んでいるから覗きにいらっしやい、同僚の出淵博先生の授業にももぐらせてもらおうといい、とおすすめてくださったのです。それが「教養イギリス科」の授業であったと当時は意識していなかったのですが、わたしが(学問として)英詩を読む最初の手ほどきを受けたのは、まさにこの時・この場所だったのでした。山内先生からは「英詩を読む」ということヒューマニスティックの人間の=人文的な〈厚み〉のようなものを、出淵先生からは文学を批評的・理論的に読むこと、そして批評について(メタ的に)思考することを、ご教示いただいたように思います。また、おなじころ、一人の若い英国人と親しくなりました(いまでも家族ぐるみの友人です)。当時の駒場では、オクスフォードあたりを卒業したてで将来おおいに出世しそうな英文学者の卵を任期付教員として雇い入れる、いわば「青田買い」のような慣習があったようで、わが友 Nick Midgley もそうやって「(将来性を)買われて」来ていた 20 代半ばの若者でした。能楽堂にはじめて行ったのもこの英国人に連れられてのことでしたし、T.S. Eliot の「荒地」をすすめてくれたのもニックでした。この出会いもまた、わたしの研究者人生にとって決定的な〈はじまり〉のひとつだったわけですが、こちら(知らず知らずのうちに)イギリス科が用意してくれた〈ご縁〉だったのでした。

さまざまな出会い、さまざまな〈はじまり〉に恵まれた駒場の地に、知天命の年に舞い戻ってくることとなりました。わたしにとっては、また新たな〈はじまり〉です。この 30 年で人も建物もずいぶんと変わり、構内で迷子になることもしばしばです。けれど、こうやって行先を迷いながら銀杏並木をうろうろしているうちに、生意気な若者と出会うと思わぬ対話が生まれるかもしれません。それがその若者にとって予想外の〈はじまり〉となるかもしれません。そんなことを想像するのは、なかなか愉快なものです。諸先達の紳士道とは縁遠い、あいかわらず野卑で野蛮なわたしですが、そんな出会いと対話を大切にしながら「毎日が〈はじまり〉」という気持ちで第二の駒場生活をめいっぱい愉しみたいと思っています——「われわれは探究を止めはならない/すべてその探究の目的は/われわれが出発したところに到着することであり/また初めてその場所を知ることであろう」(T.S. Eliot, "Little Gidding" [『四つの四重奏』最終章]、西脇順三郎訳)。



＜再開されたコモンルームでのパーティ、着席右から二人目が三原先生＞



ポーランドから

塚本明子 (12 期)

私共が今住んでいるのはポーランドの首都ワルシャワの南側に隣接する Konstancin-Jeziorna 市という、1989 年に制定された自治体 (gmina) で、ワルシャワを含むマゾフシェという県 (województwo) に属しています。「イエ

「ジョルナがどこか知っているか」というのは十八世紀の終わり頃まであった決闘の警告でした。当時ワルシャワ内での決闘が禁止されていたためです。

20 年ほど前に家を建てようと訪れた頃、この辺りは草ぼうぼうで、そのなかにもりんごの樹がたくさんまじっていました。農地か住宅地か、ということで、建築許可をとる手数が大変でした。街灯もない石ころだらけの坂を登り、畑の畦道らしいところを歩いた奥の区画でしたが、それから夜の間に建材がなくなっていたり、知らぬ間に壊れた車が捨ててあったりしました。

イエジョルカ川はほとんど平らな土地をゆっくり南にのびてヴィスワ川に合流します。ヴィスワの河口はバルト海に面するグダンスクで、そこから南へワルシャワ、ルブリン、西に曲がってクラクフを結んで、チェコとの国境あたりが水源です。10 世紀ごろからこの川は、木材、塩、穀物、建材の運搬や兩岸の豊かな農産物の交易の中心でした。

河岸へはよく散歩にゆくのですが、道の途中には巣箱型、灯籠型の祠のなかに素朴なマリア像が祀られています。人口の 80% はカトリック教徒というポーランドのマリア信仰に不思議はないのですが、道端の木製のマリア像のスタイルや表情は、私などがみながれている「聖母子像」と異なるものが多く、また幼児キリストがいないのが多いようです。ウクライナもそうですが、カトリックと東方正教会のはざまにあるこの国は、ロシアにとっては「ラテン」の手先ですが、しかしマリア像にはロシアあるいはビザンチンのアイコンとの共通性もいろいろみられます。ウクライナはもっと歴史的、地理的に複雑で、一時ポーランド領土だった西部は「東方カトリック」教会が主体です。マリア信仰については「神を産んだ者」か「賤の女」なのかとかいうような神学上の議論もありますが、小さなマリア像はむしろお地蔵様のように、民間信仰がキリスト教に吸収されたものではないかという気がします。

橋を渡って三叉路になったところにパピエルナとよばれるショッピングセンターがあって、名のおり水車ももちいた製紙工房のあったところ。18 世紀初頭にウイーンから輪転器が導入されてからここで王家の公式書簡とか、紙幣、有価証券などが印刷され、またのちのポーランド共和国憲法もここで印刷されたそうです。1794 年ごろという最初

の紙幣は縦長で、紙幣番号と発行者のサインは手書きです。ポーランド紙幣の変遷をみると国の分割のたびに名前もデザインも作り変えられ、発行されてすぐに無効になったり、という歴史が興味深いです。パピエルナの隣に水曜と土曜の朝に市が立ちます。産み立ての鶏卵とか、森のきのことか、今はイチゴがどっさり出回って、おいしいのです。

その先が文化遺産となっている鉱泉保養地区になります。ここは 20 世紀初め領主が母コンスタンチアのためにヴィラノフの宮殿から鉄道を敷き、そこにテニスコートとか英国風公園とかホテルなどを建て、居住区をひらきました。以後、マゾフシェの富裕層の起業家や芸術家、貴族、弁護士、医者などの夏のリゾート地、保養地となり、良質な食塩水の出る泉を中心に、松の木の多い良い空気も利用して、多くの医療施設ができました。並木通りをいくとネオクラシック、アルプス ゲストハウス風、ネオルネッサンス、ネオバロック、アールヌーボーなど思い思いに趣向を凝らした古い邸宅が当時の詩人や画家、また文人たち、外国からの要人などの姿を彷彿とさせます。

しかし第二次大戦中はここは急場の病院となり、1941 年にはドイツ軍が侵入、ユダヤ人共同体も抹殺され、生存者はワルシャワのゲットーに送られました。戦後の 1952 年にソ連管理下の共産党によって没収されて以後、今はとても住めなくなっている建物も多く見られます。こうした土地や建物の訴訟、元所有者への返還、賠償手続きはいまだに終わっていません。

気になるウクライナ事情ですが、侵攻以来 2 年過ぎて、戦況も変化し、またポーランド＝ウクライナ関係も変化して、穀物輸入の問題、ミサイル落下問題、スパイ問題などが表面化し、そして大戦時代の虐殺の記憶も蒸し返されています。いつのまにかウクライナ人も以前ほど見られなくなりました。

EU と移民問題や法律問題でもめてきた「法と正義」(PiS) 党に代わって去年政権を獲得した親 EU の新首相 Donald Tusk は加盟 20 年の記念式典で「5 年後にはポーランド人はイギリス人より裕福になっているだろう」と豪語しました。両政権とも、ウクライナ支援をてこに、ポーランドの、そしてもと共産圏「東欧」のヨーロッパにおける、また NATO における重要性を強調したいという意図

もあるのでしょう。こうした「西欧」に対する屈折した思いは日本の「近代化」や「西欧」化に重なるところもあります。それにしても各々利害のずれる国々が「反プーチン」で結束するというのは皮肉というべきか、現実政治というべきか…。



ブライトン、釧路、パブリックヒストリー

藤田 祐 (45 期)

イギリス科への進学が決まったのは 1994 年秋で、30 年が経とうとしています。釧路公立大学に就職するまで十数年にわたってイギリス科研究室に出入りし、人生のかなり長い時間を過ごしました。2000 年夏から 1 年あまりはサセックス大学に留学し、そして 2019 年秋から 1 年間は在外研究でサセックス大学に所属してブライトンで暮らしていました。

留学から在外研究までの約 20 年間にブライトンで起こった大きな変化は、サセックス大学のある郊外の Falmer にスタジアムが建設されたこと、留学時代はホームスタジアムなき 3 部のチームだった Brighton and Hove Albion がプレミアリーグに昇格したことです。

BHA のロゴや愛称になっているカモメはブライトンでも釧路でもよく見かける海鳥ですが、同じ海沿いの街でも雰囲気はかなり違います。気候も、ブライトンは周辺地域とあまり変わらず、秋から冬にかけて天気が悪く、春から夏にかけては比較的良好な天気ですが、春から夏にかけての釧路は、なかなか気温が上がりにくいです。昼間は晴れていても、夕刻になるとどこからともなく湿気がやってきて、頻りに地元民が「じり」(海霧)と呼ぶ天候になります。

日本一の水揚げ量を誇った時期もある遠洋漁業基地だった釧路は、周辺の炭鉱から運ばれてくる石炭の積み出し港でもありました。現在でも釧路市には日本で唯一坑内採炭を続ける「釧路コールマイン」が残っています。数年前までは採掘した石炭を港まで運ぶ石炭列車も現役でしたが、採掘された石炭を利用す

る火力発電所が新設されて役割を終え、廃止されました。少し前に長く操業を続けていた製紙工場も撤退し、製紙会社のチームから続いてきた地元のアイスホッケーチームもなくなりました。産業の衰退とともに人口減少の止まらない地方都市の窮状に直面してもあります。

産業の発展とともに発展して産業の衰退とともに衰退している釧路とは異なり、リゾート地として発展してきたブライトンは、今もいろいろな人々が集まってきています。娯楽施設のあるピア（棧橋）と海水浴場からなる海沿いの地区は、シーズンになると人であふれ、中心街が空洞化して人があまり歩いていない日本の典型的な地方都市の釧路とは好対照です。ピアの近くには、1872 年に開業した水族館もあります。『相互扶助論』で知られるアナーキズム思想家のクロポトキンも訪れ、水族館の生物から触発された思想を展開したと言われて

います。ブライトンは、50 年前からセクシュアル・マイノリティに対する差別反対や平等な権利獲得を求めてきたイギリス最大のプライド・フェスで知られてもいます。また、オーガニック食品やベジタリアン向けの食品を取り扱うお店もかなりあり、2010 年からイギリスで唯一の緑の党所属国会議員を当選させてきた選挙区（7月の選挙では新人の争い）のある都市でもあります。

釧路でも、ブライトンでも、私が近年関心をもっているパブリックヒストリーにつながる活動が行われています。パブリックヒストリーは、ここ何十年かで英語圏を中心に広がった潮流で、歴史という営みを公（パブリック）に開いて一般の人々が行う歴史実践を重視する潮流です。歴史は、専門家が歴史書を執筆したり一般読者が歴史書を読んだりするというような営みに留まるものではありません。誰でも生きている限りは何かのかたちで過去と関わっています。そのような過去との関わりを「歴史する」(doing history)という概念でとらえて理論化するとともに、博物館やポピュラーカルチャーなど様々な領域で専門家と一般の人々が協同して「歴史する」実践を探求してきたのが、パブリックヒストリーです。

釧路では、複数の団体が街歩きを企画して実践しています。鉄道が敷設されるまで釧路の中心だった南大通周辺の地域では、地元の青年団体が「くしろ元町

フットパス」と名付けられたルートを策定して街について学べる講座を展開したり、市立博物館の学芸員が街を歩きながら解説するイベントが開催されたりしています。また、鉄道が敷設されてから昭和時代にかけて栄えた、駅前から延びる北大通でも、「北大通を歩こう会」による活動が行われています。街歩きは、現在に残された歴史遺産をたどることで、現在の都市空間に刻印された過去をたどるだけでなく、街歩きを通じて参加者がどのように街とかかわってきたのかが語られることで、街の過去が想起される機会でもあります。

ブライトンに関しては、West Pier Trust の活動を紹介します。かつては現役の Palace Pier と並んで観光地ブライトンを象徴するピアだった West Pier は、1970 年代に老朽化で閉鎖されてから嵐や火事などにたびたび見舞われ、現在は骨組みが残るのみです。West Pier Trust は、元々老朽化で閉鎖されたピアを修繕・再建して再オープンを目指す基金でしたが、近年は近くの海岸にセンターをオープンし、展示やトークイベントなどで様々な観点からブライトンの歴史にふれる機会を市民に提供しています。

2022 年 8 月のベルリン大会に続いて今年 9 月にルクセンブルクで開催されるパブリックヒストリーの国際学会に参加する予定です。前回に続いて今回も幅広い企画が展開される予定なので、いろいろ吸収していきたいと考えています。



イギリス科同窓会のお知らせ

来る 10 月 19 日（土）（ホームカミングデー）、駒場キャンパスで 5 年に一度のイギリス科同窓会を開催いたします。

詳しくは、後日改めてご案内いたしますので、みなさま是非、お誘い合わせの上、お出かけ下さい。

卒業生の方へ お礼とお願い

イギリス科卒業生、旧教職員のみならず、毎年お送りしているニュースレターや同窓会のご案内などに必要な通信費は、みなさまからのご寄付に頼っております。お陰様でここ数年は、多くの方の温かいご支援を得て、資金面の心配をせずにすみしました。ここに厚く御礼を申し上げます。

ただ本年は、同窓会の開催などで例年より若干経費が膨らむ見込みです。引き続き、ご支援をご検討いただけますと幸いです。ご賛助いただけます場合は、下記口座までお振り込みいただきますよう、お願い申し上げます。

ゆうちょ銀行

名義:イギリス科

口座番号:10090-2-43621671

ゆうちょ銀行以外からお振込みの場合、口座番号が異なります。

銀行名:ゆうちょ銀行

支店名:〇〇八店(ゼロゼロハチ)

口座種別:普通 口座番号:4362167

また、ご連絡先（住所・電話番号・メールアドレス等）に変更・訂正等おありの方は、卒業生専用アドレス [igirisuka\[at mark\]ask.c.u-tokyo.ac.jp](mailto:igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp) までお知らせ下さい。

このニュースレターを紙媒体でお受け取りの方には、この機に是非、電子化へのご協力をお願いいたします。

2024 年度 イギリス科運営委員

西川杉子（S セメスター主任、A セメスター副主任）、小川浩之（A セメスター主任）、三原芳秋（S セメスター副主任）、後藤春美（Newsletter 担当広報委員）、アルヴィ宮本なほ子

近藤亮介（教務補佐）